

ウチの鎮守府の嫁艦談議

ゆき(LOUDER好き)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある日の鎮守府で起きた小さな思ひ出話

目次

ウチの鎮守府の嫁艦談議

—————

瑞鶴

1 番最初に指輪を渡された艦娘

提督曰く「私の人生の中で唯一愛した女性」らしい

翔鶴

2 番目に指輪を渡された艦娘

提督が瑞鶴に指輪を渡して以来提督に「翔鶴義姉」と呼ばれていた

今は「翔鶴姉」

榛名

3 番目に指輪を渡された艦娘

提督に姉である金剛のことを相談されて以来意気投合添い遂げた

時雨

4 番目に指輪を渡された艦娘

忠犬のような性格が提督の心を鷲掴みにし添い遂げた

金剛

5 番目に指輪を渡された艦娘

提督は金剛のことを嫁として見ず神として崇めているよう

だが、金剛自身はそれを知らず不満に思っている

—————

金剛（以下金）「うう……」ムスッ

榛名（以下榛）「どうされました？お姉様」

金「テートクが私の事嫁として見てくれないデース」

瑞鶴（以下瑞）「また言ってる……」

翔鶴（以下翔）「そうね……」

時雨（以下時）「そうかい？僕から見れば金剛さんも愛されてるよう

に見えるけど」

金「愛されてるのは愛されてマスがどうも違うような気がしマース

……」ムスッ

瑞（私その原因知ってるけど言うなって言われてるしな……）

翔（瑞鶴が葛藤してる…何かあるのかしら？）
瑞「そう言えば、提督さんまた帰ってきたね」
榛「そうですね…榛名ビツクリしちゃいました」
翔「お出迎えしたらアレだったものね…」
時「流石にアレは僕も撃ちそうだったよ」
瑞「馬のマスクで登場だものね私も本気で爆撃してやろうかと思っ
たわ」

時「あれ？いつもは本気じゃないの？」

翔「いつもは演習用の爆薬だもの…ね？」

瑞「／／／／／」

瑞「にしても毎回帰って来た時には驚かされるわ…」

翔「私の時も何かしたのかしら？」

瑞「翔鶴姉の時はね…」

――――

提督（以下提）『翔鶴義姉を義理の姉じゃなくて嫁にして生活したい
！』

瑞『は、はあ…』

提『というわけで、瑞鶴この編成でいいよな？』

瑞『うん、いいけど…本気で言ってるの？』

提『俺が本気じゃなかったらこんな事言わねえ！』

瑞『翔鶴姉にも伝えとく？』

提『そ、それはもう少し後にしてくれ…』／／／

瑞『ん、分かったわ。じゃ私達行ってくるね』

提『おう！頑張つて来いよ！待ってる！』

――――

瑞「つてな感じだったわ…」ハア…

翔「なんと言うか…その…提督らしいわね」

榛「榛名の時は…」

――――

提『なあ、榛名』

榛『はい、なんでしよう提督』

提『俺さ、金剛さんの事好きなんだよ』

榛『まあ…それは…榛名、大丈夫じゃないです』／／／

提『でもさ、俺にとつて金剛さんってどうしても嫁としてじゃなくて俺をこの世界に導いてくれた神様みたいな存在なんだよ…』

提『だからさ、指輪渡そうか迷うんだ…』

榛『榛名としてはお姉様の幸せ…そして、提督の幸せがあれば大丈夫です！なので提督…お姉様に気持ちを伝えてみてはいかがですか？今このことを含みつつそれでいてお姉様と提督にとつて幸せだと思えるようなことを伝えてみればいいと思います！』

提『榛名…分かった俺伝えてくるよ』ガタツ

榛『提督、ファイトです！』ギユツ

提『』／／／

榛「お姉様に伝えた後、榛名にも伝えたいことがあると言われてそのまま指輪でしたね…」

瑞「へえ…そうなんだ…榛名の時は分からなかったなあ…塞ぎ込んでたし」

時「僕の時は…」

――――

提『皆、久しぶり！』

瑞『久しぶり！じゃないわよ！どこ行ってたのよ!!爆撃するわよ！』

翔『まあまあ、瑞鶴それは話を聞いてからにしましょう?』

提『えっ』

提『実はとあるスタジオのスタッフとして働くことになってなそこで聴いたあの曲がヤバくてなあ…ああ…?。??。?したいんじゃ』

翔『瑞鶴、行くわよ…!』

瑞『ええ、全機爆装…準備出来次第発艦』

翔瑞『目標、目の前の提督!殺っちゃって!』

ドカーン!

榛『どうされたのですかお二人共』

瑞『かくかくしかじか』

榛『なるほど…納得です』

瑞『提督さん遺言は?』

提『死ぬ前に時雨に指輪渡したかった…』ガクツ

瑞翔榛『はあ!?!』

――――

瑞「まさか、あんなになって帰ってくるとは思わないじゃないの」

翔「ええ、でもいつも通りの爆撃だったからこうして時雨ちゃんも

ここに居るのよ」ウフフ

瑞「私達いつも提督におどかさされてばかりだけど私が提督を驚かしたこともあったわね…」

時「あの作戦の時だね…」

――――

提『たっだいまー皆ー元気してたかー?』

瑞『何呑気にしてんのよ今は大規模作戦中よ』

提『え?どなた?』

瑞『失礼ね…貴方が唯一愛した瑞鶴ですよ!分からないの?』

瑞『とんだクソ提督ね…曙の気持ちわかる気がするわ』

提『え?マジで瑞鶴なの?やべえカツコイイな…』

瑞『ほら、ボサつとしてないで指揮とりなさいな一応言つとくけど貴方がここの指揮官なんだからね!』

――――

翔「瑞鶴、あの時は気合い入ってたものね…私が毎日結んであげたツインテールをしなくなつて法被?なんか着て」

瑞「あの作戦だものそりゃ気合い入るよ…!ね?時雨」

時「ああ、そうだね僕達にとつてあの作戦はそれほどの物さ」

時「そういえば、提督最近よく咳き込んでるけどあれって何か病気がじゃないの?」

瑞「あくあれねそんなに心配しなくて大丈夫よ」

翔榛「どうしてなの(かしら)(です)?」

瑞「あれは、アレルギー性鼻炎で毎年なってるものよ今年は随分と

遅いけど毎年冬から春にかけて鼻づまりと戦ってるわ咳はその影響よ」

翔「へえ、私達知らなかったわ…流石提督が唯一愛した女性ね…」

瑞「ちよつ、翔鶴姉やめてよ！私だって心配で聞いたんだから！」

／／

金「瑞鶴はいいですネーテートクに愛されまくって」

瑞「あ、そうそう金剛に言っておかないといけないことがあるんだけど」

金「何デスカー？また出撃とかなんじやないんデスカ？」

瑞「違う違う、なんで提督が金剛を嫁として見てないのかその理由よ」

金「！」ガバツ

瑞「ねえ？知ってる提督ってこの鎮守府の中でどうしてもさん付けじゃないと呼べない人が2人いるって事」

瑞「1人は、加賀あの方は私や翔鶴姉の先輩だし稽古を付けてくれたから敬う必要があるって」

瑞「もう1人は、金剛…貴女よ」

瑞「貴女は提督が提督になるきっかけになった人だし私と出会うきっかけにもなったそして別の鎮守府だけど私を助けたのも貴女らしいの」

瑞「だから、金剛は神様のように崇高な存在なんだ好きのベクトルが違うんだって」

金「あのテートクがそんなこと思ってるわけ…」

瑞「本当よ、貴女は私の…私たちの大切な人を私たちと巡り合わせてくれた人なの」

瑞「だから貴女は特別な悔しいけど貴女が提督の1番なのあの人の中で私には届かない場所にいるもの」

瑞「だからね、元気だして？いい？」

金「わかったデース…！」

金「私、なにか間違ってた気がします」

金「テートクに伝えてきます…私を選んでくれてありがとうってこ

れからも愛していただきますって」

瑞翔榛時「ああ、行つてらっしゃい！」

金「テートク!!どこに居るネー!?!」

大淀「提督でしたら執務室に…」

金「Oh、淀ありがとネー!バアアアアニングラアアアブ!!!!」ダッ

提「うわっ!金剛さんちよっ、危ないって!」

金「大丈夫ネー!提督サンキューネー!」